

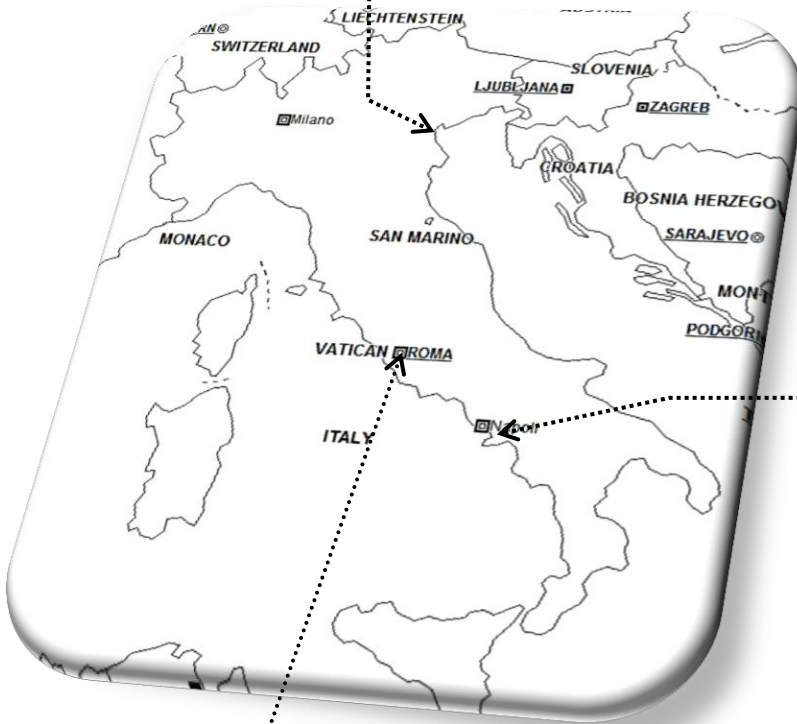
pietra grezza
ピエートラ・グレッツァ

2012.文化祭号

東大寺学園
世界文化研究会

目次

Venice P18~P24



Pompeii
P25~P29

Rome P4~P17

ローマの歴史

(1) ローマの起こり、王政期(B. C. 753-B. C. 509)

伝説によれば、ローマは紀元前 753 年 4 月 21 日にギリシャ神話の英雄アイネイアスの子孫である、双子のロムルスとレムスによってティベリス川(現在のティベレ川)河畔に建てられたと言われています。ここでロムルスはレムスとローマを築く場所について争って、レムスを殺しました。その後に、ロムルスは 7 代続く王政ローマの初代の王となり、また彼の名がローマの市名の起源と言われています。

考古学のほうから見ると、ローマに人々が住み始めたのはこの伝説よりももっと早く、紀元前 9 世紀か 8 世紀ごろに、北方の民族がテヴェレ川河畔に移住したことが起こりではないかと思われています。

当初はエトルリア人などの王を擁っていたそうです。

王政は紀元前 509 年に第 7 代の王タルクィニウス・スペルブスが追放されるまで続いたことになっています。



←狼の乳を吸うロムルスとレムスの像です。

(2) 共和政ローマ(B. C. 509-B. C. 27)

紀元前 509 年、ローマは第 7 代の王タルクィニウス・スペルブスを追放し共和制を敷きました。共和政下では 2 名のコンスルを国家の指導者としながらも、クァエストル(財務官)など公職経験者から成る元老院が圧倒的な権威を有しており、国家運営に大きな影響を与えました。一方で、ローマはイタリア半島各地の都市を制圧していきました。イタリア半島南部にはアッピア街道が建設され、南部遠征の遂行を助けることになりました。紀元前 272 年、南イタリアにあったギリシャの植民市タレントゥムを陥落させ、イタリア半島の統一を成し遂げました。

☆ポエニ戦争

イタリア半島の統一を果たしたローマは、西地中海の商業覇権をめぐって、紀元前 264 年よりカルタゴとの百年以上の戦争へ突入しました(ポエニ戦争)。ローマは第一次ポエニ戦争でシチリアを獲得し、この地を最初の属州としました。紀元前 218 年より始ま

った第二次ポエニ戦争では、カルタゴの将軍ハンニバルに一度敗れるものの戦況を巻き返し、再びカルタゴに勝利します。この際、カルタゴの拠点を奪い、西地中海の征服を果たしました。また、カルタゴに味方したマケドニアにも遠征を行い、ギリシャを影響下に置きました。紀元前 149 年より第三次ポエニ戦争が行われ、紀元前 146 年にカルタゴは制圧されました。

☆内乱の一世紀

ローマとは対極的に没落の運命をたどったのは、ローマ軍の中核をなしていた自由農民でした。毎年の出征で農地から引き離され、また属州から安価な穀物が流入したため次第に没落していきました。この状況を打開するために、グラックス兄弟が、平民の支持を得て、土地分与の改革を実施しようとしたのですが、紀元前 133 年に兄ティベリウス、紀元前 123 年に弟ガイウスが反対派によって命を落とし、改革は失敗に終わったのです。

第三次ポエニ戦争の後も対外征服戦争および反ローマの反乱などによりローマの軍事活動は止むことがありませんでした。また、初めてゲルマン人がローマ領内へ侵入したのもこの時期であり、帝政ローマ期を通じローマを悩ませることとなりました。

こうした状況では、優れた指揮能力を持つ者を執政官に選ぶ必要がありました。その顕著な例が元平民で兵士出身のガイウス・マリウスです。彼は長期にわたる征服戦争への動員で没落した市民兵の代わりに、志願兵制を採用し大幅な軍制改革を実施しました。この改革はローマの軍事的必要を満たし、かつ貧民を軍隊に吸収することでその対策ともなりましたが、同時に兵士が司令官の私兵となって、軍に対する統制が効かなくなる結果をもたらしたのです。

はじめに軍の首領としてローマ政治に君臨したのはマリウスとルキウス・コルネリウス・スッラでした。彼らの死後、一時的に共和政が平常に復帰しましたが、やがて次の世代の軍閥が登場しました。ポンペイウス、カエサル、クラッススの 3 人です。3 人は元老院への対抗から第一回三頭政治を結成しましたが、クラッススの死後、残る 2 人の間で内戦が起きました。地中海世界を二分する大戦争は、紀元前 48 年にポンペイウスが死んだ後もしばらく余波を残しました。

カエサルは紀元前 45 年に終身独裁官となりましたが、王になる野心を疑われて、紀元前 44 年 3 月 15 日にブルートゥスら共和主義者によって暗殺されました。この後、カエサル派のオクタウィアヌス、アントニウス、レピドゥスが第二回三頭政治を行ないました。カエサルの遺言状で相続人に指名されたオクタウィアヌスは紀元前 31 年に、ア

クティウムの海戦でアントニウスに勝利し、紀元前 27 年に「尊厳者(アウグストゥス)」、「第一の市民(プリンケプス)」の称号を得て、共和政の形式を残しながらプリンキパトゥス(事実上の帝政)が始まりました。

オクタヴィアヌス(ローマ帝国初代皇帝) ↓



(3) 帝政ローマ(B. C. 27-395)

オクタヴィアヌス以降、帝政初期のユリウス・クラウディウス朝の世襲皇帝たちは実質的には君主であったにもかかわらず、表面的には共和制を尊重してプリンケプス(元首)としてふるまいました。これをプリンキパトゥス(元首政)といいます。

このようにして始まったローマ帝政ですが、ティベリウスの死後あたりから、政治・軍事の両面で徐々に変化が起こり、その結果によって、ユリウス・クラウディウス朝からフラウィウス朝の僅か 100 年の間に 3 名の皇帝が軍隊によって殺害され、2 名が自殺に追い込まれるという不自然な形で皇帝の交代が頻発しました。

帝国の拡大はこの時期にも続いており、43 年にはクラウディウス帝によってグレートブリテン島南部が占領されて属州ブリタンニアが創設されました。

この頃はローマ市の改造や属州制度の改革(元老院属州と皇帝属州の創設)などを行い、帝国の基盤が整えられました。帝国の領域は拡大し、安定した防衛線に守られた帝国領内は安定して、パクス・ロマーナ(ローマの平和)と呼ばれる時代が続きます。

14年にアウグストゥスが没した後に帝位を継いだティベリウスも内政の引き締めを行って大過なく国を治めたものの、3代カリグラは暴政を行って暗殺されました。次のクラウディウスはカリグラが破綻させた内政を再建し、再び安定した国家を築きあげました。続くネロの統治は当初は善政でしたものの、次第に暴政の色を濃くし、68年に暗殺されました。ネロが死ぬと皇位継承戦争が発生し、4人の皇帝が次々と擁立されたことから、この時期を四皇帝の年とも呼びます。やがてウェスパシアヌスが勝利し70年にフラウィウス朝を開始すると、ローマは小康状態を取り戻しました。フラウィウス朝はウェスパシアヌス、ティトゥスと名君が続きましたが、次のドミティアヌスが暗殺され、後継ぎがなかったためにフラウィウス朝は断絶しました。

ドミティアヌスが暗殺されたのち、紀元1世紀の末から2世紀にかけて即位した5人の皇帝の時代にローマ帝国は最盛期を迎えます。この5人の皇帝を五賢帝といいます。

そのうちの一人、トラヤヌス(在98-117)は「至高の皇帝」と呼ばれています。ローマ帝国は、ダキア、アラビア、アルメニア、メソポタミア、アッシリアを占領して属州を置き、帝国領土は、東はメソポタミア、西はイベリア半島、南はエジプト、北はブリテン島にまで及びました。

五賢帝時代の末期頃に天然痘の流行により人口が減少し、その後各地で反乱が頻発するようになりました。これに対処すべく、212年、カラカラ帝の「アントニヌス勅令」によって、ローマの支配下にあるすべての地域に、同等の市民権が与えられました。

いわゆる「元首政」の欠点は、元首を選出するための明確な基準が存在しない事です。そのため、235年3月18日の皇帝アレクサンデル・セウェルス暗殺に始まり、その後ローマ帝国は50年の間に26人の皇帝という混乱した状況に陥りました。今日では軍人皇帝時代として知られています。

284年に最後の軍人皇帝となったディオクレティアヌス(在位:284年-305年)は、元首、つまり終身大統領のような存在である皇帝を据えたキメの粗い緩やかな支配から、オリエントのような官僚制を主とする緻密な統治を行い、専制君主を据える体制にしました。これ以降の帝政を、それまでのプリンキパトゥス(元首政)に対してドミナートゥス(専制君主制)と呼びます。また彼はテトラルキア(四分割統治)を導入しました。四分割統治は、東西二人の正帝(アウグストゥス)と副帝(カエサル)によって行われ、ディオクレティアヌス自身は東の正帝に就きました。

混乱が続く中、西方副帝だったコンスタンティヌス1世が有力となり、324年には唯一の皇帝となりました。コンスタンティヌス1世は東のサザン朝ペルシアの攻撃に備えるため、330年にビュザンティオン(ビザンティウム;現在のトルコ領イスタンブール)

に遷都し、コンスタンティノポリスと改称して国の立て直しを図りました。しかしコンスタンティヌスの死後、特に 375 年以降のゲルマン民族の大移動が帝国を揺さ振ることとなりました。

☆キリスト教について

帝政初期に帝国領内のユダヤ属州で生まれたイエス・キリストの創始したキリスト教は、徐々に信徒数を増やし、2 世紀末には帝国全土に教線を拡大しました。単独の皇帝となったコンスタンティヌス 1 世（大帝。在位：副帝 306 年-、正帝 324 年-337 年）は、313 年にミラノ勅令を公布してキリスト教を公認しました。その後もキリスト教の影響力は増大を続け、後のテオドシウス 1 世（在位：379 年-395 年）のときには国教に定められ、異教は禁止されることになりました（392 年）。

☆ローマ帝国の分裂

395 年、テオドシウス 1 世は死に際して帝国を東西に分け、長男アルカディウスに東を、次男ホノリウスに西を与えて分治させました。当初はあくまでもディオクレティアヌス時代の四分割統治以来、何人もの皇帝がそうしたのと同様に 1 つの帝国を分割統治するというつもりであったのだが、これ以後帝国の東西領域は再統一されることはありませんでした。

(4) 西ローマ帝国 (395-476)

西ローマは、スティリコの補佐を受けた皇帝ホノリウスのもとで一時的な安定期を迎えました。408 年にスティリコがホノリウスによって自殺させられると、ホノリウスが親政を執り、423 年に没するまで帝位に就いていたものの、その治世は蛮族（とりわけヴァンダル族と東ゴート族）の侵入と帝位篡奪者とが相次ぎました。410 年に、紀元前 4 世紀のガリア人の侵入以来、初めてローマが掠奪されます。475 年には、かつてアッティラの腹心だったオレステスが、ユリウス・ネポス帝をラヴェンナから追放し、わが子ロムルス・アウグストゥルス（正式にはロムルス・アウグストゥス。アウグストゥルスは小アウグストゥスの意）が皇帝であると宣言しました。

いくつかの孤立地帯において西ローマ帝国の支配が続いたものの、西ローマ全域における帝国の支配権はとうに失われていました。476 年にオレステスが、オドアケル率いるヘルリ連合軍に賠償金を与えることを断ると、オドアケルはローマを荒掠してオレステスを殺害、ロムルス・アウグストゥルス帝を退位させて帝位のしるしを東ローマ帝国皇帝ゼノンのところに送り返し、自らはゼノン帝の宗主権の下イタリア王として立ちました。一般には、西ローマ帝国は、476 年 9 月 4 日にオドアケルがロムルス・アウグストゥルス帝を廃した時に滅んだとされます。

(5) 東ローマ帝国(395-1453)

一方、東ローマはゲルマン人の侵入を退けて古代後期ローマ帝国の体制を保ち、コンスタンティノポリスの東ローマ政府が唯一のローマ帝国の正系となりました。イタリア王のオドアケルが東ローマ皇帝の代官として振る舞うなど、西ヨーロッパのゲルマン人の諸国やローマ教皇に宗主権を認めさせました。

ローマ帝国再統一の最後の希望は493年に訪れました。この年オドアケルが、テオドリック大王に掃討されたからです。テオドリックは、帝国の西側、特にローマ市を征服すべく、東ローマ皇帝ゼノンに徴募されていました。テオドリックは東ローマ皇帝に従属し、その副王に任ぜられていました。しかし政治的には自立していて、テオドリックが526年に没したとき、西ローマはもはや東ローマとは別物になっていました。

東ローマ帝国は西ローマ帝国の滅亡の後も幾度か、蛮族によって占領されていた西ローマの故地を奪還しようとしていました。特に「ローマ帝国」を自称する東ローマ帝国が、名前に反してローマを支配していない事実は、容認し難い事でした。最大の成功は、ユスティニアヌス1世の二人の将軍、ベリサリウスとナルセスが535年から545年に行なった一連の遠征です。ヴァンダル族に占領された、カルタゴを中心とする北アフリカの西ローマ領が東ローマ領として奪回されました。遠征は最後にイタリアに移り、ローマを含むイタリア全土と、イベリア半島南岸までを征服するに至りました。ユスティニアヌス1世はテオドシウス1世から約150年ぶりに、西方領土と東方領土の両方を単独で実効統治するローマ皇帝の地位に就いたのでした。

3代目のニカイア皇帝テオドロス2世ラスカリスの死後、摂政、ついで共同皇帝として実権を握ったミカエル8世パレオロゴス（在位：1261年 - 1282年）は、1261年、コンスタンティノポリスを奪回。東ローマ帝国を復興させて自ら皇帝に即位し、パレオロゴス王朝（1261年 - 1453年）を開きました。これは落日の帝国と呼ばれています。

☆東ローマ帝国 滅亡へ

しかし、かつての大帝国時代のような勢いが甦ることはありませんでした。ミカエル8世の息子アンドロニコス2世パレオロゴス（在位：1282年 - 1328年）の時代以降、祖父と孫、岳父と娘婿、父と子など皇族同士の帝位争いが頻発し、経済もヴェネツィア・ジェノヴァといったイタリア諸都市に握られてしまい、まったく振るいませんでした。

そこへ、西は十字軍の残党やノルマン人・セルビア王国に、東はトルコ人のオスマン帝国に攻撃されて領土は首都近郊とギリシャのごく一部のみに縮小しました。14世紀後半の皇帝ヨハネス5世パレオロゴス（在位：1341年 - 1391年）はオスマン帝国のスルタンに臣従し、帝国はオスマン帝国の属国となりました。

14世紀末の皇帝マヌエル2世パレオロゴス（在位：1391年 - 1425年）は、窮状を打開しようとフランスやイングランドまで救援を要請に出向き、マヌエル2世の二人の息子ヨハネス8世パレオロゴス（在位：1425年 - 1448年）とコンスタンティノス11世ドラガセス（在位：1449年 - 1453年）は東西キリスト教会の再統合を条件に西欧への援軍要請を重ねましたが、いずれも失敗に終わりました。

1453年4月、オスマン帝国第7代スルタンのメフメト2世率いる10万の大軍勢がコンスタンティノポリスを包囲しました。東ローマ側は守備兵7千という圧倒的に不利な状況の中、2ヶ月近くにわたって抵抗を続けましたが、5月29日未明にオスマン軍の総攻撃によってコンスタンティノポリスは陥落。皇帝コンスタンティノス11世は部下とオスマン軍に突撃して行方不明となり、東ローマ帝国は完全に滅亡しました。これによって、古代以来続いてきたローマ帝国の系統は途絶えたのです。

フォロ・ロマーノ

フォロ・ロマーノは、ローマにある古代ローマ時代の遺跡で、観光地として有名です。



紀元前6世紀頃からローマ帝国がテトラルキアを採用する293年にかけて、国家の政治・経済の中心地でしたが、ローマ帝国が東西に分裂し、首都機能がラヴェンナに移されると異民族の略奪にさらされるようになり、西ローマ帝国滅亡後は打ち捨てられ、土砂の下に埋もれてしまいました。

概要

フォロ・ロマーノは、東西約 300m、南北約 100m に渡って存在する古代ローマの中心部「フォルム・ロマヌム」の遺跡です。古代ローマでは、たいていの都市に政治・宗教の中心としてフォルム（英：フォーラムの語源）と呼ばれる広場が置かれていましたが、このフォロ・ロマーノは首都に開設された最初のフォルムであり、最も重要な存在でした。ローマでは、後に諸皇帝によっていくつかのフォルムが建設されましたが、3 基のバシリカと元老院議事堂を備えたフォロ・ロマーノは、そのなかでも中心的存在として機能し続けました。

歴史

フォロ・ロマーノがいつごろからローマ市の中心となったのかは、はっきりとしていません。フォロ・ロマーノでは、定期的に民会（コミティウム）が開催されており、そのための広場は宗教的な儀式によって聖別されていました。民会は、クリア・ユリアとセプティミウス・セウェルスの記念門に挟まれた場所にあり、紀元前 3 世紀前半から紀元前 1 世紀前半までは、ロストラ（演壇）を備えた直径約 30m の露天の円形広場でした。民会議場に隣接して北側に元老院議事堂（クリア・オステリア）も設置されていました。神殿も建立され、サトゥルヌス神殿は紀元前 498 年、カストルとポルックス神殿は紀元前 484 年、コンコルディア神殿は紀元前 366 年の創建とされています。しかし、これらの建物の形式は明確ではありません。フォロ・ロマーノにおいて、唯一、その初期の姿が分かっているのはレギアのみです。レギアは大神官の公邸として機能したもので、鉄器時代の木造建築物の遺跡の上に、紀元前 5 世紀のものと思われる炉を中心とした広間と、それに付随する二つの前室、そして中庭を備えた邸宅の遺跡が重なっています。また、ウィトルウィウスによると、共和制末期まで剣闘士による闘競はフォロ・ロマーノで行われていました。

フォロ・ロマーノが現在の輪郭になったのは、ガイウス・ユリウス・カエサルによる西側の大改装の結果です。すでにそれ以前から、フォロ・ロマーノを整然と計画されたものにする努力は行われており、カエサルの計画は、いわはその集大成でした。その計画は彼の暗殺によって、初代ローマ皇帝アウグストゥスへと引き継がれることになりました。現在の遺跡はほとんどがその計画の後に建設されたものとなっています。

西ローマ帝国が滅びた後、中世の時代になると、フォロ・ロマーノは完全に忘れ去られ、カンポ・ヴェッキオと呼ばれる放牧場になりました。

主な遺跡

フォロ・ロマーノには大小様々な遺跡が残っており、ウィア・サクラ（聖なる道）に沿って、西から東に向けて以下の順に並んでいます。

クリア・ユリア

元老院議事堂。ガイウス・ユリウス・カエサルによって起工され、アウグストゥスが紀元前 29 年に完成させたものを、皇帝ディオクレティアヌスが再建しました。現在の建物は、さらにそれを 20 世紀に復元したものです。共和制時代から帝政前期にかけて、ローマの政治的中枢として機能した、いわば国会議事堂です。

フォカスの記念柱

東ローマ帝国の皇帝フォカスによって、608 年に建設された記念柱です。造営当時は柱の上に皇帝の像が設置されていました。すでに西ローマ帝国は滅びており、フォロ・ロマーノに建設されたローマ帝国による最後の建築物です。

バシリカ・ユリア

火災によって消失したバシリカ・センプロニアの跡に造営されたバシリカです。ガイウス・ユリウス・カエサルによって起工された（皇帝アウグストゥスが 12 年に完成）ため、バシリカ・ユリア（ユリウスのバシリカ）と呼ばれています。5 廊式の巨大建築物で、4 つの民事法廷が開設されていました。

サンタ・マリア・アンティクァ聖堂

ローマ最古の教会堂のひとつです。皇帝宮殿の図書館を改装して利用されていましたが、9 世紀に地震によって倒壊した。21 世紀になって発見され、修復されています。

ディウウス・カエサル神殿

アウグストゥスによって紀元前 29 年に建てられた神殿です。ディウウス・カエサルとは神君カエサルの意味で、紀元前 49 年にユリウス・カエサルが神格化されたことを受けたものです。現在は神殿の基礎構造のみが残っています。

アウグストゥスの凱旋門

ディウス・カエサル神殿とカストル・ポルックス神殿の間に建設された、戦勝を記念して造られた記念門です。現在はほぼすべて失われています。

ウェスタ神殿

ローマのすべての竈の火を象徴する神殿です。現在の遺構は、205年にセプティミウス・セウェルスによって建造されたもので、フォロ・ロマーノで唯一の円形神殿です。中に祭られる火は絶えず燃やし続けられ、これを管理する女性神官はウェスタの巫女と呼ばれました。

アントニヌス・ピウスとファウスティナ神殿

皇帝アントニヌス・ピウスが、141年に没した皇后大ファウスティナのために捧げた神殿です。後にアントニヌス・ピウス自身もここに葬られました。11世紀になると、神殿跡にサン・ロレンツォ・イン・ミランダ聖堂が建設されましたが、1602年に神殿の一部を再建するかたちで教会堂が設計しなおされ、現在のような状態になっています。

ウェヌスとローマ神殿

女神ウェヌスと女神ローマの神殿です。皇帝ハドリアヌスが意図的にギリシャ建築に倣った形式で設計したもので、わざわざ小アジアから職人を招集して建設されました。現在は一部の遺構のみが残っています。

ティトゥスの凱旋門

現存するローマ市最古の記念門です。ユダヤ戦争の戦勝記念として81年に建立されたものです。高さ15.4m、幅13.5m。

コロッセオ

コロッセオ（ラテン語：Colosseum コロッセウム、イタリア語：Colosseo コロッセオ）は、ローマ帝政期に造られた円形闘技場です。英語で競技場を指す colosseum や、ロシアムの語源ともなっています。現在ではローマを代表する観光地です。

歴史

コロッセウムはネロ帝の黄金宮殿（ドムス・アウレア）の庭園にあった人工池の跡地に建設されました。すでに掘り下げられていたため池の水を抜くだけで済み、基礎工事をいくらか省略することができたそうです。工事はウェスパシアヌス治世の75年に始ま

り、ティトゥス治世の 80 年から使用されるようになりました。使用開始に当たっては、100 日間に渡りイベントが続けられ、数百人の剣闘士が闘い命を落としています。なお、完成したのはドミティアヌスの治世中でした。

フラウィウス朝の皇帝が建設者であることから「フラウィウス闘技場」（フラウィウス円形闘技場）が本来の名前ですが、ネロ帝の巨大な像（コロッセ）が傍らに立っていたためコロッセウムと呼ばれるようになったといわれています。

そんなコロッセオも中世には、使用されている建材が、他の建築物に流用され続けました。つまり一種の採石場とされていたのです。その大理石はバチカンのサン・ピエトロ大聖堂にも使用されています。それにもかかわらず往時の姿をとどめているのは、迫害されたキリスト教徒がここで殉教したと伝えられていたため、一種の聖地となっていたからです。しかし、キリスト教徒が迫害されたという明確な証拠はないそうです。ローマ教皇ベネディクトゥス 14 世によりコロッセオは神聖であるとして保存されるようになり、現在外周は半分程度が残っています。古代の完全な状態に再現しようとする動きはなく、このままの形で保存されていくであろうといわれています。

かつて多くの殺人（公開処刑を含む）が行われた場所であることから、現在では死刑廃止のイベントのために使用されています。例えば、11 月 30 日の「死刑に反対する都市（Cities for Life）」の日や、新たに死刑を廃止した国が出たときには、その記念としてコロッセオがライトアップされます。2007 年 1 月には、イラクのサッダーム・フセイン元大統領が処刑されたことに抗議するために点灯されました。

構造

火山灰を利用したコンクリートで出来て、鉄骨を用いないコンクリートにも関わらず幾多の地震の際も崩壊しなかったのは、全体が円筒形で力学的に安定していたためといわれています。

長径 188m 短径 156m の楕円形で、高さは 48m、45,000 人を収容できたそうです。また、天井部分は開放されていますが、日除け用に布を張る設備がありました。皇帝席には一日中直射日光が当たらないように設計されており、また一般の観客席についても一日に 20 分以上日光が当たらないように工夫がなされています。

初期においては競技場にローマ水道より引いた水を張り、模擬海戦を上演することさえ可能でしたが、後には、複雑な舞台装置を設置したためにそのような大規模演出は不可能となりました。また人力エレベーターも存在し、剣闘選手の入場のために使われました。現在でも、その巻き上げを行った柱の跡が残っています。

コロッセウムの横には噴水が作られました。それは「メタ・スダンス（汗をかく標識）」といわれ、闘いを終えた剣闘士もここで体を洗ったと伝えられています。



←コロッセオ

→壁面の穴は戦傷の痕ではなく、建設および補修時の足場用の木材を挿入するための穴です。



←地下から登場した猛獣の餌食にされようとしているキリスト教徒。

トレヴィの泉

トレヴィの泉（Fontana di Trevi）は、ローマにある最も巨大なバロック時代の泉で、ローマでも有数の観光名所として賑わっています。

ポーリ宮殿の壁と一体となったデザインで、中央に水を司るネプトゥーヌス（ポセイドーン）が立っています。

元々は古代ローマ時代に皇帝アウグストゥスが作らせたもので、ヴェルジネ水道（ウィルゴ水道、乙女の水道の意）の終端施設としての泉が場所を替えた後、今の位置になりました。その後、泉はローマの建築家ニコロ・サルヴィの設計で改造、彼の没後の1762年に完成しました。

後ろ向きにコインを泉へ投げ入れると願いが叶うという言い伝えがあり、投げるコイン

の枚数によって願いが異なるともいわれています。コイン1枚だと再びローマに来ることができ、2枚では大切な人と永遠に一緒にいることができ、3枚になると恋人や夫・妻と別れることができるそうです。この泉に投げられたコインは回収され、半分がカトリック系チャリティ団体に寄付されます。

トレヴィの泉にはコインの伝説以外にもめずらしい逸話が残されています。それは、かつてこの泉の水が石灰を含まずローマで一番おいしい水と言われ、汲みだして飲み水にされていた頃、女の子たちは戦に出かける恋人に離れている間の誠実さの証としてコップにこの水を汲んで飲ませ、その後そのコップを割って未来の幸福への願掛けをしていたというものです。それがもとで、今では泉の右側にある小さな水飲み場で恋人や夫婦で水を飲むと永遠に別れないと言われていています。この水は別名 *L'acqua dell'amore* (愛の水) と言われていています。



スペイン広場

スペイン広場（イタリア語：Piazza di Spagna [ピアッツァ・ディ・スパーニャ]）は、イタリア・ローマ市の都心部にある広場です。「スパーニャ」とは「スペイン（エスパーニャ）」のイタリア語呼称で、間近にあるスペイン大使館にちなんで命名されました。広場の中央には、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ作の「バルカッチャの噴水」があり、東には大階段があります。

スペイン広場には、トリニタ・デイ・モンティ教会へと続くトリニタ・デイ・モンティ階段、通称「スペイン階段」が接しています。設計はフランチェスコ・ディ・サンクティスによるもので、1725年に完成しました。波を打つような形態はバロック的な効果をあげています。

映画「ローマの休日」で、オードリー・ヘプバーン扮する王女がジェラートを食べたシ

ーンでもおなじみの場所でもあり、当初、フランスの外交官の寄付によって造られたものの、スペイン広場にあるためこの名で呼ばれています。

現在はスペイン広場付近の地下鉄入り口付近に階段を上らずに上にいけるエレベーターが設置されています。また、保護のため広場での飲食は法律で禁じられており、ローマの休日のシーンのようにジェラートを食べる事はできません。

またこの辺りでは、日本人に対して高額のミサंगा（1本€50 ぐらい）を売ってくる人もいるので、要注意です。



ヴェネツィアの歴史

ヴェネツィアは、大陸からの川のの流れに乗ってくる土砂、そしてアドリア海の波と風の力によって作られた湿地帯です。

古代、ヴェネツィア周辺の地域にはウェネティ人が住んでいました。そこに、5世紀になってアクイレイア、パドヴァなどの北イタリアの都市の住民が、ゲルマン人のイタリア侵略の影響を受けてこの湿地帯へと避難してきました。この時の避難先が現在の「トルッチェロ島」です。ヴェネツィアは足場が悪い湿地帯のため、侵入者は追って行くことが出来ず、避難した人々はここで安定した生活を続けるようになります。干潟に住むメリットを保つため、干潟を荒らしたり干拓したものを極刑にする、という法を作ったりしました。

彼らは12のおもな島の護民官たちを中心とした政府を組織しました。アドリア海沿岸地域は元々東ローマ帝国の支配下にあるため、名目上は東ローマ帝国に属しましたが、実質的には自治権を持っていました。697年、ヴェネツィア人は初代総督を選出して独自の共和制統治を始めます。これがヴェネツィア共和国の始まりです。つづく1世紀間は政府内部の不和のため不安定な政治が続きましたが、外敵の脅威に対して結束し、836年にはイスラムの侵略を、900年にはマジャールの侵略を撃退しました。

9世紀始め、フランク王国がヴェネツィアを支配下に置こうとして軍を派遣しました。そのため、トルチェロにいた人々は更なる避難を余儀なくされ、現在のヴェネツィア本島へと移り住むことになったのです。810年に東ローマ帝国 - フランク王国間で結ばれた条約で、ヴェネツィアは東ローマ帝国に属するが、フランク王国との交易権も持つこととなり貿易都市への布石が置かれました。

このころ、ヨーロッパ各国では、その国の存在をアピールする目的でその国の守護聖人を求める風潮がありました。ヴェネツィアでも同様に守護聖人を求めていたところ、福音書著者である聖マルコの遺骸がエジプトのアレクサンドリアにあり、それがムスリムに奪われる恐れがあることを聞きつけ、828年、それを奪い取りヴェネツィアに運びました。この時からヴェネツィアは聖マルコを守護聖人とすることになったのです。

10世紀後半からはイスラム諸国とも協商条約を結び交易を拡大しました。さらにアドリア海沿岸への支配地域の拡大にも努めていきました。ジェノヴァ共和国などの同じイタリアの貿易都市とは違い、都市の周辺海域が大国・東ローマ帝国の制海権内にあったために、イスラム勢力による海上からの直接的脅威を感じる事が少なかったことも、イスラム諸国との関係を積極的に進める要因となったのです。

1204年、第4回十字軍とともにヴェネツィア艦隊は東ローマ帝国首都のコンスタンティノポリスを攻略、援助の見返りとしてクレタ島などの海外領土を得て東地中海最強の海軍国家となり、アドリア海沿岸の港市の多くがヴェネツィア共和国の影響下におかれました。ヴェネツィア共和国は東ローマ帝国分割で莫大な利益を獲得し、政治的にも地中海地域でヨーロッパ最大の勢力をほこるようになったのです。

富裕な貴族たちは政治の支配権の獲得を目論んで、13世紀末ごろには寡頭政治がおこなわれるようになりました。13～14世紀には商業上の宿敵であるジェノヴァとの戦いが続きます。1378～81年の戦いで、ジェノヴァはヴェネツィアの優位を認めました。その後も侵略戦争で周辺地域に領土を獲得したヴェネツィアは、15世紀後半にはキリスト教世界でも屈指の海軍力をもつ都市国家となったのです。

しかし、15世紀半ばのオスマン帝国の進出により、ヴェネツィアの海外領土が少しずつ奪われていき、最盛期は終わりを告げることになりました。1538年のプレヴェザの海戦で、オスマン帝国は地中海の制海権をほぼ抑えました。その上、大砲の登場により干潟に住むメリットがなくなってしまったヴェネツィアは、その後の諸外国の侵略や、ほかのイタリア都市の攻撃で、力が弱まります。また、1497～98年にポルトガルの航海者ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰をまわるインド航路を発見したため、貿易の対象がアジアに移り、ヴェネツィアの貿易に対する影響力は低下し、衰退は加速されました。これに対してヴェネツィアはガラスやレースなどの工芸品を作ることで対処しました。1508年、ヴェネツィア共和国に対抗して神聖ローマ帝国、教皇、フランス、スペインは同盟をむすび、ヴェネツィア領土内にある財産を没収します。1516年、ヴェネツィアは巧妙な外交でイタリアでの支配権をとりもどしますが、海洋国家としての地位は回復できませんでした。

1797年、ヴェネツィア共和国はナポレオン・ボナパルトに侵略され、ついに崩壊しました。ナポレオンはその領土をオーストリアに引き渡しました。そのオーストリアは港湾都市としてヴェネツィアよりトリエステを重視したため、ヴェネツィア経済は衰退の一途をたどります。その翌年、ヴェネツィアとロンバルディアはロンバルド＝ヴェネト王国をつくり、ヴェネツィア人はイタリアの政治家マニンの指導のもとで、1848年にオーストリア支配に対する反乱をおこし、ヴェネト共和国を建国しました。しかし、その翌年にオーストリアの攻撃により降伏。1866年に普墺戦争がはじまると、イタリア王国はこれを第三次イタリア統一戦争としてオーストリアに宣戦布告し、この結果ヴェネツィアとヴェネト地方はイタリア王国に編入されました。

1987年、『ヴェネツィアとその潟』として、世界文化遺産に登録されました。

サン・マルコ寺院



サン・マルコ寺院は、福音記者マルコにささげられた、イタリアのヴェネト州の州都ヴェネツィアで最も有名な大聖堂です。

ビザンティン建築を代表する記念建築物であるとされていますが、その当時、コンスタンティノポリスで 500 年以上も前に流行した形式を採用しています。

サン・マルコ広場に面して建ち、ドゥカーレ宮殿に隣接し、繋がっています。建物内部は黄金に煌く壁や天井があり、祭壇には 2,000 個もの眩い宝石が埋め込まれた黄金のついたてがあります。

ドゥカーレ宮殿



イタリア語で Ducale (形容詞) は公の、公爵の、総督の、を意味し、Palazzo は館、宮殿 (英語の palace に相当) を意味します。ヴェネツィアのドゥカーレ宮殿はサン・マルコ広場にあり、共和国の総督邸兼政庁だった建造物です。8 世紀に創建され、14 世紀 (1309 年) -16 世紀にかけて現在の形に改修されました。外観はゴシック風のアーチが連続し、イスラム建築の影響も見られる細やかな装飾が施されています。

ヴェネツィアの伝統工芸品

□ヴェネツィアン・グラス

ヴェネツィアン・グラス（英語: Venetian glass; ヴィニーシャン・グラス、イタリア語: vetro di Murano; ヴェートロ・ディ・ムラーノ 「ムラーノ島のガラス」）は、イタリア北東部ヴェネト州の州都・ヴェネツィアで作られるガラス工芸品の地域ブランドです。

概要

ヴェネツィアン・グラスの特徴は鉛を含まないソーダ石灰を使用する事で、コバルトやマンガンなどの鉱物を混ぜることで様々な色合いを表現することが出来るそうです。

混ぜた鉱物により硬度が変化し、赤色のものが最も硬度が高いとか…。

高い装飾性も特徴のひとつです。基本的な製法はソーダガラスを使用した吹きガラスですが、空中で吹くことにより極薄に吹き上げる技法や、グラスを細く引き伸ばしそこに竜や花や鳥などをモチーフにした複雑な装飾を施すなど、「軽業師の妙技」と呼ばれる高度なテクニックが用いられています。

また昔は、極限まで薄く吹いたグラスを割り、カーニバルの行列で紙ふぶきの代用としてばら撒かれた時代もありました。

歴史

ヴェネツィアン・グラスの発祥は、13世紀中世ヴェネツィア共和国が東方諸国のすぐれた産物をヨーロッパ諸国に独自供給し東西貿易の中心地となる中で、その中でも最も珍重されていたガラス製品を自国で生産すれば多大な利益を得ることが出来ると考えガラス製造に乗り出したことに始まるともいわれていますが、トルチェッロ島からは7世紀ないし8世紀のガラス工房跡やガラスが発見され、文献上も10世紀末にはガラス製造のことが登場することから、ヴェネツィアン・グラスの正確な起源は謎に包まれています。ヴェネツィア共和国は当時最も進んだ技術を持っていたアンティオキアと協定を結び、原料や燃料さらにはガラス職人までもヴェネツィアに移しました。これによりローマ帝国ーイスラム時代から発展してきたガラス技術を取り入れ、応用することでヴェネツィアン・グラスの技術は発展を遂げていくことになるのです。

しかし元々原材料や燃料を自国で産出できない土地柄であるヴェネツィア共和国は、ヴェネツィアン・グラスの技術が原材料の豊富な国々に漏れコピー製品が作られることを

恐れのため強力な保護政策を取りました。1291年には全てのグラス工房のムラーノ島への強制移住を決定し、グラス職人やその家族・販売者を島に住まわせ、島外に逃げる者は厳しく罰し、功績を挙げたものには手厚い褒章を与えるという法令を発令しました。この政策には、本島での火事を防ぐためという名目もあったそうです。これにより狭い島の中に工房が密集したため、技術の切磋琢磨が進みグラステーブルやシャンデリア、鏡など様々な名品が作られました。

一方でこのような厳しい保護政策の下でも逃げ出す職人はおり、各地に散らばりガラス技術を伝えました。このような職人達の教えにより他の地方で作られたヴェネツィア様式のグラスをファソン・ド・ヴニーズ（フランス語: *façon de Venise*）と呼びます。

ルネサンス期の15世紀～16世紀にはその繁栄は頂点に達しました。ヴェルサイユ宮殿の「鏡の間」はムラーノ島から連れ出された12人の職人が作成したと言われていました。この時代に一番力を注いだ技法がエナメル装飾で、貴族達は華麗な絵付けの施されたガラス製品を競うように買い求め、エナメル絵付けの施されたガラス製品を持つことがひとつの社会的ステータスとなっていました。またこの時代に、ソーダガラスに消色剤を加え透明度の高い無色透明のガラス（クリスタッロ）の製法が確立されました。これは他国には無い技術であり、王侯貴族の間で高く取引されたそうです（その精巧な技術による薄さは毒を入れると割れるという噂も手伝って、王侯貴族の間で取引されたとも言われています）。レース・ガラスの発明もこの頃で、以降のヴェネツィアン・ガラスの代表的な装飾技法となりました。ただし、この時期はガラス職人が法の網の目をかいくぐって海外に流出した時期でもあるのです。これによってヴェネツィアン・ガラスの技法と様式が海外に広められたとも言えます。

17世紀・18世紀には、ヴェネツィア風のガラス製品がヨーロッパ中で大流行しました。現在でもムラーノ島では多くの工房が軒を連ね、豊かな伝統技術を親から子へと受け継がれています。



ヴェネツィアの乗り物

□ゴンドラ

ゴンドラ(gondola)とは、ヴェネツィアの伝統的手漕ぎボートのことです。

ゴンドラは何世紀にも渡って、ヴェネツィアでの主要な交通手段であり続けました。現在も、カナル・グランデ（大水路）の岸と岸をつなぐ渡し船(トラゲット)として公共交通機関の役割を果たしています。

現在のゴンドラの数 は 200~300、そのほとんどは観光タクシーとして使われており、数艘がトラゲットや個人所有の舟です。

船としての特徴

客船としてのゴンドラには小さな客室を有するものもあり、太陽や雨を避けることができます。

ゴンドラは長くて幅が狭く（長さ 11.5m、幅 1.4m）、船体が非対称（左側に乗るゴンドリエーレとバランスが取れるように左舷の方が右舷より 25cm 程度長い）で、縦に湾曲（ロッカー）して水との接触面を最小にとどめているため、一つのオールだけで多くの推進力を得ることができます。

船の前面にある鉄製の装飾は「フェッロ・ディ・プルーア」(ferro di prua)と呼ばれています。これは、「舳先の鉄」という意味で、ヴェネツィア語ではフェーロ・ダ・プローヴァ(fero da próva)やドルフィン(dolfin)と言います。フェッロは事故の衝撃から船首を守るとともに、装飾の役割や、船尾近くに立つゴンドリエーレとバランスを取るおもりの役目をも果たします。

操船

ゴンドラは、舳先に向かって立つゴンドリエーレ(船頭)が、片方だけのオール(櫂)で、引くというより押す力によって推進します。一般に考えられているのとは違い、ゴンドラは海底を棒でつついて進んでいるわけではありません。それにはヴェネツィアの海が深すぎるのです。

オール (remo) は、オール留め (forcola) で留められています。オール留めは複雑な形をしており、オールを充てるポジションを変えることによって、ゆっくりした前進、速い前進、回転、減速、後進に対応できるそうです。

歴史

18世紀には、ゴンドラのは数は数千を超えたと思われています。

それまでは様々な色のゴンドラがありましたが、ペストが流行により多くの死者が出たため、喪に服す意味を込めてゴンドラの色を黒くしたと言われています。

ゴンドラ製造は19世紀の終わりまで発展し続けましたが、それ以降ヴェネツィアでもモーターボートがゴンドラに取って代わりつつあります。



ヴェネツィアの橋

□リアルト橋

リアルト橋(Ponte di Rialto)は、ヴェネツィアの canal・グランデに架かる4つの橋の一つで、「白い巨象」とも呼ばれています。

この橋の周辺は海抜が比較的高く洪水の被害も少ないため、ヴェネツィアでは最も早くこの周りに集落ができ商業の中心地となりました。最初は木製の跳ね橋で、銀行や商品取引所で賑わっていたため「富の橋」と呼ばれましたが、女公爵の結婚式の時、見物人の重みで崩壊したり、火災に遭ったりしたため、石造りの橋に変えようと提言され、1557年、ヴェネツィア共和国は橋の設計案を一般から募集しました。一般公募にはミケランジェロも参加しましたが、結局、採用されたのはアントニオ・ダ・ポンテの案でした。

ポンテの案は、橋の下を多くの船が通ることを考えた単一アーチで、その大きい太鼓橋でした。工事は軟弱な地盤や技術上の問題から困難とされましたが、4年後には長さ48m、幅22m、水面からの高さ7.5mの、その大きい太鼓橋が完成しました。

橋の上にはアーケードが作られ、商店が並んでいます。また、ヨーロッパの橋としては珍しく、canal・グランデを見晴らす欄干と花瓶型の手摺がっています。

ポンペイの歴史

(1) ポンペイの起こり

ポンペイはイタリア先住民のオスキ人によって集落が形成されました。紀元前7世紀頃、その集落はサルノ川の河口付近の丘にありました。その後紀元前526年からエトルリア人に占領されましたが、市民はイタリア南部に居住していたギリシャ人と同盟を組み、紀元前474年クマエの海戦で支配から脱しました。ギリシャ人はその後ナポリ湾を支配しました。紀元前5世紀後半からのサムニウム人の侵攻で、紀元前424年にはサムニウム人に征服されることになりました。

カンパニアの諸都市が同盟市戦争と呼ばれる反ローマ戦争を起こすと、ポンペイも反ローマ側に加わりました。しかし紀元前89年に町は征服され、ローマの植民地となりました。この時のポンペイの都市名は「ポンペイ」の名前の由来となりました。以降ポンペイは港に届いたローマへの荷物を近くのアッピア街道に運ぶための重要な拠点となり、商業都市として栄えました。

この町は商業も盛んな港湾都市である一方で、79年の火山噴火まではぶどうの産地であり、ワインを運ぶための壺が多数出土されていることから、主な産業はワイン醸造だったことがわかります。また火山の噴火以後、水位は相対的に下がっていますが、当時は港もあり海洋都市でもありました。碁盤の目状に通りがあり、大きな通りは石により舗装されていました。市の中心には広場もあり、かなり計画的に設計された都市であることも分かっています。

(2) 79年のベスビオ山噴火

62年2月5日（日）、ポンペイを襲った激しい地震によりポンペイや他のカンパニア諸都市は大きな被害を受けました。町はすぐに以前より立派に再建されましたが、その再建作業も完全には終わらないまま79年8月24日（木）にはベスビオ火山が噴火し、一昼夜に渡って火山灰が降り続けたと言われています。（ここで曜日は現在の日本で使われているものから逆算したものです。）

翌25日の噴火末期に火砕流が発生し、ポンペイ市は一瞬にして完全に地中に埋まりました。発生した火砕流の速度は時速100 km以上であり市民は到底逃げることはできず、一瞬のうちに全員が生き埋めになりました。降下火山灰はその後も続き、軍人でもあった博物学者のガイウス・プリニウス・セクンドゥス（大プリニウス）は、ポンペ

イの市民を救助するために船で急行しましたが、煙に巻かれて死んだことが甥のガイウス・プリニウス・カエキリウス・セクンドゥス（小プリニウス）による当時の記述から知られています。

当時、唯一の信頼できる記録は、死亡したガイウス・プリニウス・セクンドゥス（大プリニウス）の甥のガイウス・プリニウス・カエキリウス・セクンドゥス（小プリニウス）が歴史家タキトゥスに宛てた手紙です。これによると、大プリニウスはベスビオ火山の山頂の火口付近から、松の木のような形の暗い雲が山の斜面を急速に下り、海にまで雪崩れ込んだのを見たときと記録しています。火口から海までを覆ったこの雲は、火砕流であり、火山が噴火したときに、高温ガスや灰や岩石がなだれのように流れる現象です。プリニウスは爆発時に地震を感じ、地面は非常に揺れたと述べています。さらに灰がどんどん積もり、彼は村から逃げなければなりませんでした。その時、海の水がみるみる引き「津波」がおきました。プリニウスの記述によると、太陽が爆発によって覆われてよく見えなかったそうです。大プリニウスは、この現象を調査するために船で再び陸に向かいましたが、窒息して死にました。二酸化炭素中毒によるものと現在では考えられます。市民の多くが火砕流発生前にローマなどに逃げましたが、火砕流が発生した時に市内に残っていて助からなかった市民も多くいました。

(3) 爆発以後のポンペイ、発掘

噴火によって壊滅した後は二度と集落が作られることはありませんでしたが、その後1000年以上「町」という地名で呼ばれたほか、古代の品が発見されたので、下に都市が埋まっているのではとささやかれていました。1738年にヘルクラネウム（現在のエルコラーノ）が、1748年にポンペイが再発見され、建造物の完全な形や当時の壁画を明らかにするために断続的に発掘が行われました。

ポンペイとその周辺の別荘からは多数の壁画が発掘され、古代ローマの絵画を知る上で重要な作品群となっています。これらは、とても良い状態で発見されました。ポンペイの壁画が豊かな色彩を失わなかった秘密は、この街を襲ったあの悲劇にありました。

79年のベスビオ山の噴火は、当時の人々の生活をそのままの状態地下に保存したのです。地中から次々と現れるローマ時代の遺品が美しいままの理由は、火砕流堆積物にありました。火山灰を主体とする火砕流堆積物には乾燥剤として用いられるシリカゲルに似た成分が含まれ、湿気を吸収しました。この火山灰が町全体を隙間なく埋め尽く

したため、壁画や美術品の劣化が最小限に食い止められました。ポンペイの悲劇が皮肉にも古代ローマ帝国の栄華を今に伝えることになったのです。

ポンペイは、建造物や街区が古代ローマ当時のまま残っている唯一の町として知られています。生き埋めになった人々は、後に発掘されたときには遺体部分だけが腐ってなくなり、その部分に空洞ができていました。そこに石膏を流し込むことでその人の最後の姿がわかるようになったのです。これは、他の美術品などとともに保存・展示されています。

当時のポンペイはとても活気のある都市でした。整備された上下水道の弁は、現在とほとんど変わらない仕組みできれいな水を町中に送っていました。

爆発時の町の人口は1万人弱で、ローマ人（ローマ市の住民）の別荘も多くありました。実はヴェネツィアのような船上生活をしていた人がいたことが判明した（2002年発見）など現在も新事実が続々と報告されています。火砕流は歴史的にはまれな現象であり、目撃者は殆ど全員が死亡するので伝説としても残りにくく、一般の人に理解されることは困難です。この噴火では火砕流以外に麓のサンピエール市で泥流が発生し、警察の留置場に拘留されていた死刑囚を含めた3名のみを残して住民約2万8千人が一瞬にして全滅しました。

噴火直後に当時のローマ皇帝ティトゥスはポンペイに使者を出しますが、すでに壊滅したあとでした。ポンペイ市民の多くが火砕流発生前にローマなどに逃げましたが、火砕流が発生した時に市内に残っていて助からなかった市民も多くいました。

この遺跡は現在、ユネスコの世界遺産に指定されています。



←ベスビオ火山の噴火と、当時のポンペイ

イタリアの南北の地域性

イタリアを語る場合、南北の違いは避けて通れないテーマであります。イタリアは南北に細長く、また東西は背骨を形成するアペニン山脈によって分断されています。このため、北と南では雰囲気はまったく違ったものになっています。南のサルデーニャ島などは本土から隔絶された地であって独自の文化圏を持ち、シチリアは、サラセンやノルマン、カルタゴ、ビザンティン文化が入り混じり、独自の風土を形成しています。ピエモンテ、アオスタ、ロンバルディアからパダナ沃野を経てヴェネツィアに至る北イタリアでは、アルプス山脈が北に連なり、これが屏風の役目を果たして冷たい風を遮断しています。そのため緯度の割に寒さはそれほど厳しくなく、山の懐が深いため豊かな農産物に満ちています。アルプスの雪解け水がポー川やその支流を潤し、パダナ平原を豊かにしています。この地域はイタリアの農産物の多くをまかなっており、とても裕福な土地柄です。これらの地域に住む人々は人柄が穏やかで、その食生活も非常に豊かです。また季節には四季があり、情緒があります。ここに住んでいる人々は、いわゆる日本人が思い描く“陽気で調子のよいイタリア人”とはイメージがだいぶ異なるのです、ここの多くの人々は、南イタリアとはトスカーナを除くボローニャ以南を指すと考えています。イタリアという国は南と北とでは、経済的富裕度や気質の面で全く別の国であるといっても過言ではありません。風土が違うと当然ながら、食生活や生活慣習にも違いが生じてきます。南イタリアは保水力に乏しいアペニン山脈の伏流水があるとしても、大地は乾燥しており日差しが強すぎて、夏の灼熱の大地は、多くの農産物をはぐくむには厳しすぎます。灼熱の大地に降る雨は養分豊かな土壌を海に流してしまうのです。反面、厳しい環境で育った農産物は大地に深く根を張り、個性的な作物である場合が多いです。プーリア州などでは平坦な土地が多いですが、日照が厳しいため深く大地に根ざす作物でなければ夏枯れを起こしてしまいます。アドリア海やテレニア海は魚が豊富で、魚種もとても多いです。しかしながら、水産業は零細であり、船団を組んで一大水産業を形成する力を持っていません。農業はオリーブを除いて恒常的な不作で、明らかに北と比べて劣っています。南では貧困を感じる人が多いのです。このことは、教育水準ならびに食生活などにも著しい差となってあらわれています。特にバジリカータ州やカラブリア州にはシチリアマフィア以上に恐れられている犯罪集団があり、北イタリアの人々から敬遠される原因にもなっています。しかしながら、気さくで陽気、しかも調子のよい南イタリアの人々は、我々日本人にとって親しみやすく、また南イタリアに年中

照りつづける太陽も魅力的で、いわゆるイタリアを感じさせてくれる場所であることに変わりはありません。鮮度のよい魚介と、親しみやすいトマトソースのパスタなどは日本人を居心地よくさせてくれます。怖いというイメージが強い南イタリアですが、とても魅力的な場所であることには全く変わりありません。

執筆者・参考文献一覧

ローマの歴史：渡辺真広
フォロ・ロマーノ：熊野匠
コロッセオ：松永健聖
トレヴィの泉・スペイン広場：松永健聖
ヴェネツィアの歴史：松永健聖
サン・マルコ寺院・ドゥカーレ宮殿：中島悠貴
ヴェネツィアの伝統工芸品：松永健聖
ヴェネツィアの乗り物：松永健聖
ヴェネツィアの橋：松永健聖
ポンペイの歴史：渡辺真広・熊野匠
イタリアの南北の地域性：熊野匠

Wikipedia

<http://www.chichukaifoods.com/foods/taro002.html>

その他プリントなどの作成者・参考文献一覧

年表・地図：池田湧哉
模型：奥岡曹太朗
クイズ構想：野村健一・中島悠貴・春田秀輝・水島亮太
クイズ作成：松永健聖・池田湧哉
レシピ：松永健聖・熊野匠

いちばんやさしいイタリア料理（成美堂出版）

東大寺学園 世界文化研究会

高校1年を中心にした同好会です。

料理に、模型作りにと様々な活動をしています。

会員大募集！！詳しくは、4年B組松永まで。

◎活動場所：4年D組 ◎活動日：水曜日・土曜日



東大寺学園 百人一首部

百人一首部新入部員急募！！

活動日：水曜日以外の好きな日に

活動場所：和室（中学棟昇降口右，事務室の奥）

入部希望者は、和室まで。





東大寺学園世界文化研究会会誌 **pietra grezza** 文化祭号

顧問：平井康博先生

執筆：松永健聖・渡辺真広・熊野匠・中島悠貴

発行責任者：松永健聖

表紙・裏表紙作成：池田湧哉

編集：松永健聖・池田湧哉

メンバー：松永健聖・池田湧哉・渡辺真広・奥岡曹太郎・野村健一・熊野匠・中島悠貴

準メンバー：春田秀輝・水島亮太

この会誌の著作権は、世界文化研究会及び参考にさせていただいたサイトに帰属します。

当会に無断で一部または全部の記事を複製することを禁止いたします。

複製を希望される方は、世界文化研究会にご一報くださいますようお願いいたします。

お知らせ

世界文化研究会では、学期に1回程度会誌を発行しています。

ご希望の方は、4年B組松永まで。

また、HPにも掲載いたします。

世界文化研究会は、百人一首部の活動を応援しています。



世界文化研究会

pietra grezza文化祭号

HP <http://tdjwcc.hisa-hide.com/>